しんぶん赤旗 2010年12月19日

イギリスの炭鉱争議（1984～85年）

早川征一郎 著

注目に値するその後の展望

御茶の水書房・6200円

イギリスには有名な労働争議がいくつかあるが、この争議もそのひとつで、1984年3月から85年3月まで1年におよぶ「イギリス労働運動史上、おそらく最長のストライキ」であった。著者はちょうどこのときにロンドン大学に留学しており、現地で膨大な資料を探索し、丹念にこのストライキの経過を追ったいわば現地報告が本書である。

本書が注目に値するのは、このストライキがもっている意味を解明し、その後の展望までしめしている点にある。

私が考えさせられたのは次の諸点である。第一に、このストライキは当面の問題を超えて、斜陽産業となった石炭産業をどうするのかという産業政策上の大問題がその背後にあったということである。第二に、戦後すぐにおこなわれた諸産業の国営化をサッチャー政権は民営化し続け、いわばその最後の牙城とも言うべき石炭産業の民営化問題が問われていたということである。第三に、サッチャーは自由主義的改革を進めながらも、労働運動については規制を強化し、その無力化を図ったということである。

イギリスの労働組合は「ボランタリズム」（任意制）を特徴としており、政府は労働問題に干渉せず労使の合意に任せていたのであるが、サッチャーはストライキにはスト権投票を義務づけ、組合員の意思表示もなしに役員が長期にわたってそのポストを維持することを禁止するなど、労働関係法を次々と制定していったのであった。こうしてこの争議は炭鉱労働者のみでなく、イギリスの産業政策や労働政策に大きな影響を与えたのであった。

最後に注文を一つ。97年にニューレーバーを掲げたブレア労働党政権が誕生するのであるが、この政権交代はイギリス労働運動にどういう変化をもたらしたのであろうか、著者の教えをこいたい。

評者 浜林正夫 一橋大学名誉教授

はやかわ・せいいちろう 法政大学名誉教授。